

芸術新潮

Geijutsu Shincho

October 2019 **10**

九

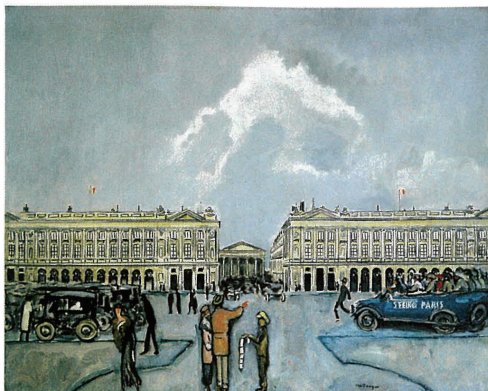
—特集—

州

世界一の

やきものの王国へ





Kees Van Dongen

オランダ出身のヴァン・ドンゲンも、フジタ同様、1967年の第6回展まで参加。
キース・ヴァン・ドンゲン（「パリの広場」）
1920年、油彩、カンヴァス、81×100cm



Pablo Picasso



右／第2回展の同人会。右から林武、朝井閑右衛門、爲永事務局長。
左／第2回展の審査風景。右から林武、朝井閑右衛門、野口弥太郎、
爲永事務局長、1人おいて海老原喜之助。

50周年記念 名品展

9月8日～12月8日 ▶ ギャラリーためなが

1969年の開廊以来、エコール・ド・パリをはじめとする西洋絵画を日本に紹介し続けてきたギャラリーためなが。50周年を記念して、ピカソ、シャガール、ルノワール、藤田嗣治、ヴァン・ドンゲン、デュフィ、ルオー、スーテン、ルドン、キスリング、ローランサン、ユトリロ、ヴラマンク等、巨匠たちの珠玉作、約40点を展覧する。

住所 ● 東京都中央区銀座7-5-4
電話 ● 03-3573-5368
開廊時間 ● 10:00～19:00（日祝は11:00～17:00）
アクセス ● 東京メトロ「銀座」駅、JRおよび
東京メトロ「新橋」駅より徒歩5分
URL ● www.tamenaga.com

目された存在。爲永氏の方は30歳になるやならずである。ベテラン画家が、親子はとも年の離れた若きギャリストの歯に衣着せぬ評言を喜び、楽しんでつきあっていたことが彷彿する。

「朝晩食事と一緒に、なにかや日本画の画壇の批判になって、じゃあ自分たちで一旗あげるかという話になりました」

それが国際形象展であり、以後、爲永氏は事務局長として実務の一切をとりしきることになる。ちなみに、形象の語は、抽象に対抗する意識から選ばれた。「その頃は、フランスでも日本でも抽象一点張りの時代で、新聞の美術評なども

抽象表現についての記事しか載らない。しかし、それではダメなので、絵というのはやはりデッサンにはじまって具象でなくてはならないというのが私の一貫した持論です。林さんなども、やはりこれからの美術は抽象なのだろうかという迷いがあつたから、具象を推進する展覧会をやろうという私の提案に賛同したのでしよう」

冒頭で見たような人々から幅広い協力を得られたのも、林の場合と同様の思いがあつたからこそにちがいない。また、ピカソと西洋の巨匠と自分たちの新作が、同じ壁に横一列にならぶことは、大家と



1963年に開催された国際形象展第2回展の会場（日本橋三越）にて。前列左から高松宮夫妻、爲永清司事務局長、林武。

いえども日本の洋画家たちにとってそれまでにない経験であり、刺激となったことだろう。

国際形象展が第25回をもって幕を閉じた1980年代は、いわゆるニュー・ペインティングによる具象回帰の時代とされる。実際、最終回のカタログにあるステートメントには、「舞台がひとつ回った」との言葉が見える。爲永氏の事務局長としての奮闘もまた、舞臺を回すのに与つて力のあるものの一つだったはずだ。もちろん、映像作品やコンセプチュアルアートが美術の中に大きな地歩を占める現在、具象・抽象の別にかつてのような意味はない。むしろ人間の原初的な表現欲求に強く結びついた存在である点にこそ、絵画の輝きはあるのではないだろうか。そして、開催中の「名品展」に作品が並ぶ、ピカソ、フジタ、シャガール、ヴァン・ドンゲンたちほど、その輝きを思い出させてくれる画家はあるまい。

か つて日本橋三越（初回のみ日本橋島屋を舞台に、四半世紀にわたって続いた「国際形象展」をこ存じだろうか。開催されたのは1962、1986年のこと。林武、島海青児、海老原喜之助、荻須高徳、岡鹿之助ら、当時の洋画壇の重鎮10名を創立同人として発足し、毎年

1回、彼らが自らひきいる団体展の枠を超えて出品したのに加え、海外からも招待作家が作品を寄せた。その顔ぶれがすごい。ピカソ、フジタ、ヴァン・ドンゲン、マックス・エルンスト、シャガール、ジャコメッティ、ダリなどなど。これに同人たちの推薦により、各団体展の中堅

や若手も参加する。かくも豪華なグループ展が生まれたきっかけは、ギャラリーためながの爲永清司会長と林武のバリにおける交流だったという。

「1960年前後、小磯良平や金山平三、林武といった人たちがパリに来ると、私はガイド役としてひっぱりだされたもの

です。中でも林武はずっと私のアパートに泊まりこんで、ノートル・ダムを描いたらどうです、などと私が勧めると描きに行く。夜になると、こんな絵じゃしょうがないよ、みたいな勝手なことを言ってたね」

林武といえは当時、洋画壇のトップと



Léonard Foujita

フジタは爲永氏が最初に渡仏した時から交流があった。没する前年まで、6回にわたり、国際形象展に参加。藤田嗣治《パリの少女》1953年
油彩、カンヴァス 22×16cm

芸術新潮特別企画

フジタ、ピカソ、ヴァン・ドンゲン

共に歩んだ国際形象展の画家たち